

東京工業大学

窯業同窓会会誌

1982年 6月



旭焼額皿 (明治26~27年)

会長就任のご挨拶

会長 中山 一郎 (昭5)



窯業同窓会の皆様には、ご健勝にお越しの事と存じます。

さて、昨年の窯業同窓会の総会に於て、前会長の森谷太郎氏の後を継ぎ、私が会長に就任致しました。このことは、私にとって考えてもいなかった事でありましたが、山内先生、森谷先生の強い推薦もありましたので、お引受け致した次第です。会員皆様方のご支援とご協力をお願いいたしまして、この大任を果たさせて頂く所存でございます。

尚、副会長には素木洋一氏、田中弘氏、田中広吉氏、埜崎賢造氏の各氏にお願い致し、常任監事の多くの方には従来通り、引続いてご就任を願い、会を運営させて頂く事に致しました。

又従来、種々お世話願いました森谷太郎氏(前会長)、田辺三郎氏、田賀井秀夫氏、齋藤進六氏(各々前副会長)の各氏には相談役にご就任願ひ、今後ともご指導を頂く事になりました。前会長・前副会長の皆様には、ご在任中のご苦勞に対して、心より厚くお礼申し上げます。

前森谷会長さんの申される通り、同窓会は同窓各位の絆を堅くして、相互の友愛の輪を拡げることが重要であると思っておりますので、従来通り総会の後には、懇親会を行う予定であります。総会にご出席出来なかつた方々には、会誌(毎年)と会員名簿(隔年)をお送りして、近況報告をいたしたいと存じます。

窯業同窓会は、明治35年高等工業に昇格して、第一回の卒業生を世の中に送り出して以来の長い歴史をもった同窓会であります。時代の移り変りにしたがって、その名称が変わって来ましたが、(大正時代は鳥又会、昭和初期は愛窯会)名称が変わるのも意味のある事と思ひます。

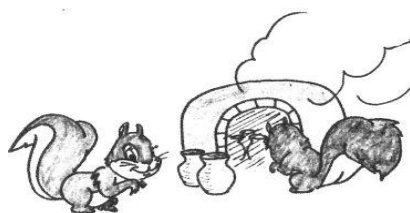
現在、大学には窯業科なる名称はなく、この科の流れをくむのが、無機材料工学科と思ひます。今や、次世代の産業基盤となる技術開発の課題として、ファインセラミックスが採り上げられて来て居りますので、無機材料工学科は実に重要な責任のある学科となりました。

従つてこの辺で我が同窓会の名称も変えてよい時期と思ひます。

また、蔵前工業会も今年東京工業大学創立百年を記念して、会員の増強を計り、学生会員をこの4月より募集致します。これには若干の会費を頂くことになっておりますので、我々の同窓会にも何らかの形で、在学生を会員として迎へられないものかと考へております。

何れにしても我々の同窓会は、会員の皆様の御好意による寄付金でまかなつて居ります。総ての事業は、その年次に集まる醸金により運営されますので、会員皆様方のご理解と応分のご協力をお願い申し上げる次第です。

最後に、会員皆様の一層のご発展をお祈り致します。



多 忙

相談役 齋藤進六



早いもので4年間の学長の職を辞してからもう半年になる。近頃どのようにお過ごしですかという挨拶をしばしば受けるが、退官の翌日アメリカに行きカリフォルニアのニューポートビーチで開催されたアメリカンセラミック協会のカリフォルニアミーティングに出席し、フルラス賞の受賞式に立ち会い、又ボロンナイトライドの工具についての講演を行った。

11月に入って東京工業大学の先輩である元科学技術庁金属材料研究所々長の橋本宇一先生に同行して台湾に赴き、工程師学会に出席し、一週間新竹方面にも足をのばして技術的な交換を行った。

この有様で退官後も依然として忙しい日時に追われている。退官して公式の仕事を何も持っていないことが反って多くの人の目につくのかも知れないが、科学技術庁、通産省、文部省の各種の審議会の委員や、科学技術会議の予算の分配を行う調査委員会にもひっぱり出されて寧日ない有様である。

その上スペースシャトルの成功が反って日本の

今後の宇宙開発事業に大きなマイナスを生み出すかも知れない宇宙行政の曲り角にあるいま、スペースシャトル利用委員会の委員長の立場であくせくとその予算集めに走り廻っている有様である。

さらに内田俊一先生、兼重寛九郎先生、緒方富雄先生などの御長老の引退後の色々な賞の選考やら企画やらを引受けさせられている状態でこんなに忙がしくは今後どうなるのかと当惑している。

そうこぼしながらも明日5月1日には約2週間の予定でアメリカに赴きアメリカンセラミックソサイアティのジェネラル・ミーティングに出席して我が国の宇宙開発の状況及び宇宙空間を利用した材料科学のレビューを行うことになっている。

どうもこのようなあわただしさが私の性分であるらしいので、これが私にとっての日常であると観じて今後も浅学非才を顧みずいろいろな仕事をやって行きたいと思う。特に昨年通産省の次世代産業基盤技術制度の中にファインセラミックスの分科会が発足し、この指示の下に業界のメーカー及びユーザー15社からなるファインセラミック研究組合が出来、更に通産省ではファインセラミック協会なるものを企画している。私としてはこのファインセラミック協会が窯業協会とうまく連絡し合い相補いながら世の中の需要と期待にこたえるものであってほしいと希望している。



第二の定年

副会長 素木 洋一 (昭15)



東京芸術大学美術学部の陶芸科が設立された際、東京工業大学在任中であつたが、請われて非常勤講師を引受け、本年3月まで十数年に亘つて週1回の講義を続けてきた。非常勤講師にも定年があるので、やつと御役御免になった次第である。

最初の数年間は専門講義であつたために、しばしば教室を離れて窯場で講義したり、アトリエで陶芸家の裏話を披露したりして結構楽しんだこともあつたが、大学紛争が終つたら私の受持ちの「陶磁原料学」が美術学部の必須講義に変わつてしまひ、陶芸科の学生だけではなく、彫塑、日本画、建築、デザインその他の専攻の学生も受講するようになって、専門の講義の内容をかなり大幅に変えざるを得なくなつてしまつた。

上野の森参りが10年以上にもなると、いろいろ変つた質問をする学生も出てくるし、印象に残つた数々の事項のうち、思い出すまま依頼された枚数だけ述べてみよう。

大学紛争のときである。校門を閉ざし、立看板を置くことだけは変つた風景ではなかつたが、学生の状態は全く違つていた。他大学の支援部隊が

旗を靡かせて応援に来て校内には一步も入れないのである。そのときの問答が気に入つた。「東京芸大の入学試験にもうからなかつた人間が何しに来たのだ」と。

ある学生が地方の窯業試験場に就職が内定した。私に是非相談にのつてくれというので、話を聞いた所、「実は信楽の試験場に就職が内定したのですが、給料がどの位もらえるものでしょうか」という。地方公務員だから大体この程度の給料はもらえる筈だと言うと彼は「止めました。早速断わつてきます」である。理由をきいてみると、そんなにもらうと「私の創作意欲が麻痺してしまう」ということであつた。

講義中での質問にはしばしば立往生することがある。釉の熟成温度の話をしたあとでのことである。「先生、アルミナはアルミニウムと酸素の化合物ですな」。私でなくても「そうだ」と答えざるを得ない。「アルミニウムは燃えますな。酸素は燃えますな。燃えるものと燃えるものがくつついてどうして燃えなくなるのですか」。私は迷答せざるを得なくなる。

最も多く質問され、最も理解させにくいのが酸化と還元の問題である。辰砂や青磁の説明にはさけて通るわけにはいかないの、無い知恵を絞つて懇切丁寧に話をするのであるが、わかつたかと聞くと「私達は化学や物理が大きらいだったので芸大に入った。もっとわかりやすく詳しく説明してくれ」という漫画にもならない返事がくる始末である。留学生にも泣かされることも多い。説明の途中で、フランス語で何というのかとなるとその場で答えられないことが多い。今、私は *Nomina si nescis, pectit et cognitio rerum* (名を知らねば物が覚えられぬ) と言つた Linne' の言葉を囁めてゐる毎日である。

所 感

副会長 田中 弘 (昭 16)



私に副会長をやれとの御命令で私よりもっと適当な人が沢山あるのに何故だろうかと思ひながら御引受けした次第です。

私は東京工大窯業同窓会の将来に大きな不安をいだいて居ります。

その一つは東京工大窯業卒業生が過去の特権的栄光の座から降りつつあることです。

私達の学生時代は三年の春休みを利用して先生に引率されて名古屋—京都—大阪—岡山—徳山—北九州と約 15 日間の工場見学旅行をするのを恒例として居りました。その間は宿泊費こそ自分で負担しましたが、先輩達の一宿一飯の御世話になり安い旅費で楽しい旅行が出来て、他の学科ではとても出来ない芸当でうらやましがられたものでした。これは先生達の顔が実業界にあっても大きな力をもっていたことと、先輩達が有力な地位を独占していた賜ものです。その時代は東京工大窯業学科の卒業生が日本の窯業界を動かしたと言っても過言ではなく、私達はここを卒業したことを一つの誇りと思つて居りました。

現在は他の大学からも無数の卒業生が窯業界へ放出されて、東京工大卒業生はほんの一つまみに過ぎない存在と化し、過去の栄光の座を降りつつあります。こうなると現実的にももの考える

人達にとっては同窓会は何んのメリットもない存在となり魅力の乏しいものとなってしまいます。

もう一つの問題点は若年層のドライなものの考え方です。私も沢山の同窓会に関係しているが何れもが悩んでいるのは若年層の会費の納入が低調であることです。

私も若い時代は同窓会には見向きもしないことが多かったが、約十年前に蔵前工業会大阪支部の午餐会へ出席したのが動機となり、自分も年をとったらこんな雰囲気の中で生活したいと考えてそれ以後は殆んど欠席したことはありません。私はここに郷愁をもとめているのかも知れませんが、同窓会へ郷愁をもとめるのは 50 歳以後とすると、それ迄の人はもっと現実的なメリットを求めていると言えます。

この度蔵前工業会でも学生会員を作り学生時代から蔵前工業会への関心をもたせてうまくつなげて行こうと言うもので従来のように大学は卒業生を鶏小屋の扉をひらいてすきな所へとんで行けばばかりに追い出すとこれを蔵前工業会は一人一人を追いかけて入会させるのに大変な苦勞を要したわけでこの制度にふみきった次第です。しかしこれだけで郷愁が出てくる時迄つないで行けるとは思えない。その中間をメリットでつながねばならないと考える。私達は 50 歳代で同窓会への郷愁。60 歳代でお寺詣りの心境がわくような教育をうけて来たが果して現在のドライな若年層が年をとってこのような心境にかわってくるのだろうか、もしそうでないなら東京工大窯業同窓会も 60 歳代の人には 50 歳代の人のお世話で無事隠退できるとしても、50 歳代の人には無縁仏になる可能性なきにしもあらずです。

どうやってこれらの問題を解決するかは私に名案はないが、解決せねばならないものとして問題を提起する次第です。

名 称 雑 感

窯業—無機材料—セラミックス

副会長 田中廣吉 (昭 17)



この度、はからずも副会長に就任いたしました。もとよりその任でない事は心得ておりますが、皆様の御協力をえまして伝統ある同窓会の発展のため責を果したいと考えておりますのでよろしく願いいたします。私は昭和 17 年の卒業で、今年学校をでてから丁度 40 年になるわけで、この意味においても日頃お世話になっている会のため、何かお力添えができれば幸と感じております。

本来ならば昭和 18 年の春の卒業すべきところを、戦時中のことで半年繰り上げて昭和 17 年 9 月に世に出されたわけで、本当に大学卒の資格があるのか中退なのかあやしい次第です。そのせいか、山内先生から、貴方達は月足らずの早産児だから今後よく勉強して充分栄養をとらないと一人前に育ちませんよ、と半分冗談、半分真面目におどされたものです。

当時窯業学科という名称は、世間一般ではなかなかわかりにくいようでした。昭和 15 年の夏、満州（現中国東北地方）の鞍山に在る昭和製鋼所へ実習に行く長い汽車旅行中、隣席の人から学生

さんは何を勉強しているの？と聞かれて、ヨウギョーですと答えたところ、再三聞き返されたあげく、ああー、魚の養殖ですか、水産学校ですねーと、ヨウギョ（養魚？）科と間違われてガツカリしたことがあります。あれやこれやで、学生間にも窯業学科をもっと近代的でスマートな学科名に変更したいという気運が強く、若気の至りでいろいろな名称を考えては諸先生に提案した思い出があります。現在は工学部の無機材料工学科となっており、非常によい学科名と思います。

しかしよく考えてみると、窯業という名称は、漢字の素養のある明治の先輩が付けられただけあって、なかなか味のある字で、学科名は別として、同窓会の名称としては将来とも変えたくないよい名前だと思うようになってきました。

ところで、私の勤務している科学技術庁の無機材質研究所ですが、時々国会の諸先生、また大蔵省、人事院などから立法、行政関係の方々が見学にくられます。開口一番に聞かれることは、貴方のところは何んの研究をしている所ですかという質問です。金属材料研究所というと鉄やアルミニウム、高分子研究所というとプラスチックというように対象物質がすぐ浮びますが、無機材質研究所の名称からはどうも具体的なイメージが浮ばないようです。そこでいろいろ説明しますと、最近では、ああー、セラミックの研究ですか、といわれて、こちらがギャフンというケースもあります。

近頃、新聞やテレビ、はては週刊誌までがセラミックスを盛んにとり上げ、いささかオーバーヒート気味の点もありますが、ともかく名称は何であれ、私共としてはうれしい時代になったものだと今昔の感にたえません。

ご 挨拶

副会長 埜崎堅造 (昭18)



窯業同窓会の副会長に選任されたという事ですので、今までは諸先輩や諸兄にお世話になるばかりでしたが、愈々自分の番になったかと観念して相勤めさせて戴くことに致しました。

昨年春に、蔵前工業会東海支部長に祭り上げられて、只今何とか努めさせて戴いて一年経過、二年目に入り母校創立百年記念事業資金募集という百載一遇の請う機にぶつかり有難さ身にこたえている折でもあります。

私は元来内向的で、公的活動とか所謂外交という対人交渉は苦手の方で、いろんな公職に就くという事は望みませんでした。逃げの姿勢である事や、やらしても間に合わないという自他共に認知された事実の下に、公職か役職か知りませんがそのようなものは回ってきませんでした。ここにきてどうしたものか大役が二つも回ってきてしまいました。

何か嫌や嫌ややっているというようにとられそうですが、否々私も男ですし人一倍良識もあり信義に厚いと思っていますので、決まったからには一所懸命やらして戴きますから、どうか皆さんのご支援ご鞭撻をお願いする次第であります。

窯業というと何となく古臭いイメージから、無機材料工学と名を変え、高尚には聞こえるが何の学問やら解ったような解らない時代を経て、今やセラミックと云えば中味は解らなくても世間ですんなりアピールし、ニューセラミックともなれば将に時代の尖端学問であり花形産業と云われるようになった今日、窯業技術者が大いに陽の当たる場所で活躍し同窓会のメンバーも続々その成果を世に問うことになったのは、誠に同慶の至りであります。

行革のあおりで大学の定員増は一切認められないという中で、母校無機材料工学科のみが例外的に10人もの増募が認められたというのも嬉しいニュースであります。

然し翻って自分の事を考えると、窯業学科を卒業させられた(戦時中の為、無理に半年繰上げ)上に当時より余り進歩していない知識を以て、所謂ニューセラミックの学問を極めていられる若い方々との交流やお世話に、一種の気後れを覚えないでもありません。

従ってそちらの方は学校関係その他の方々にお委せして、こちらはお神輿に乗せられた副会長で勤めさせて貰えたらと乞い願う事や切なるものであります。

いや副会長には会長を担ぐ仕事があります。この事は承知しておりますが、幸い中山会長とは蔵前工業会の方でも度々お会いする機会もありますので、ご指導を得ながら勤めさせて貰えるものと信じております。

常滑という田舎に住んでいる事でもありますので、何かと行届かぬ事も有るかと思存しますが、今一度諸兄のご支援ご鞭撻をお願いしてご挨拶と致します。

酒とぐい呑みとセラミックス

東海支部長 利根川 洋 (昭23)



最近の世相は、縦横の人のつながりの中で、人々は時間に追いかけてまわされて生活しているように思われる。智に働けば角が立つ。情に棹させば云々と草枕の冒頭にある通り、住みにくさがこうずると1人で酒が呑みたくなる。1人で呑む酒はどこで呑んでも静かに呑むに限る。この場合、酒は日本酒。それも口に合った地酒で、盃は皿にあらざる盃ではなく、ぐびりと呑むぐい呑みにまさるものはない。日本酒は又肴が楽しい。季節を問わない肴もあるが、肴は旬の物にまさるものはない。若葉の5月ともなれば、茶事では炉が風炉にかわり、着物はあわせからひとえにかわり、生活のリズムがすべて夏のよそおいに向う。食味は淡白な趣好に移り、木の芽をふんだんに使った鰹のたき、わらびの二杯酢、筍の木の芽あえなどが楽しく、季節の色・香・姿を楽しみながらの酒はこの世の醍醐味と云うべきであろう。

地酒は冷やかぬるめの爛したものをぐい呑みでぐびりと呑むのが良く、清酒の熱燗は磁器盃でちびり、焼酎は小盃できゅっとやるのがあう様だ。このぐい呑みは、少くとも江戸時代の前期には、

濁り酒を小ぶりの茶碗や小鉢で呑み、後期には小ぶりの盃にかわっている。これは濁り酒が清酒に代り、独りで呑んだり、親しい者と呑みかわすのではなく、多人数の中での献酬と云う風習が始まったからだと云われているが、そうかも知れない。

ぐい呑みの中で黄瀬戸・唐津・織部のものに四方や六角の物がある。これは懐石用の小向付で、料理を楽しんだあと、酒をついで酒盃として用いたと云うから、ぐい呑みは器の見立てから始まったものであろう。

私もぐい呑みは、各地の窯で焼かれたもの、作家のもの、古陶など玉石とりまぜかなりの数持っているが、季節に応じ、気分に応じて使うことは、誠に楽しいものである。

この盃も、ぐい呑みも酒を呑むための器であるから、小さいながらそこに焼物のすべてが凝縮しており、味わい、風格、気品を備えた愛すべき道具であると云える。この味わい、風格、気品の代りに機能のみを持ち、味もそつ気もない焼物が次世代基盤材料と云われるニュー・セラミックスである。近代社会において電子工業を驚くべきスピードで発展させ、社会の機構を根底から変貌させ、生活様式まで一変させたのは、まぎれもなく電子工業を支えたエレクトロニク・セラミックスの発展によるものである。更には自然界に存在しな炭化物、窒化物を作り出し、その性能・特性を向上、コントロールするまでに到達している。試験的であるにしても、セラミック・エンジン搭載車を走らせたり、新しい複合材料の開発は、第二の石器時代に突入したと見るべきであろう。

一方その華々しさは若干過熱気味のそしりは免れないにしても、今我々が直面している数多くの問題を一つ一つ解決していく事が、次世代におけるニュー・セラミックスの開花の礎石となるのではないだろうか。

ご 挨拶

名誉教授 鈴木弘茂 (昭 21)



新緑の萌えいずる好季節を迎え同窓の皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。さて私は、本年4月1日に母校を停年で退官致し、同2日付で名誉教授の称号をいただきました。昭和23年9月に、特別研究生前期を修了すると同時に、母校の文部教官、助手に任ぜられて以来、35年近くが経過し、思い返せば長いようであり、又一瞬の間のようにもあります。この間には実にいろいろの事があり、多くの困難に遭遇致しましたが、又楽しいこともありました。大過なく今日を迎えることが出来たのは、一重に皆様のご支援によるもので心からお礼申し上げます。

私は昭和37年以来、本学附置の原子炉工学研究施設（後に研究所）に転出致し、その後は原子力、高温原子炉や核融合炉の研究に没頭しておりましたが、昭和54年11月より再び古巣とも云うべき工学部無機材料学科に迎えられ、同学科における教育や研究に主力を尽すこととなり、同窓の皆様との関係も日々に深まってきたところで、その有難さが身に滲みてる昨今でありました。

昨今、本邦の科学技術の進歩、工業、経済の発

達と充実は目を見はるばかりではありますが、さらに将来の先端産業や基幹産業の確立、技術革新に備えるために、素晴らしい性能をもつ新材料の出現が極めて大切なことが、認識されております。その中でもセラミックスは花形になりつつあります。これを反映して、無機材料工学科を志望する学生の数は年々増加し、又その質も著しく向上しております。しかるに学生の定員は20名と全く少ない数のままに釘付けされており、関連会社、とくに諸先輩に一方ならぬ御迷惑をかけつづける結果となっており、これを解決するために定員の増加が、学科や工業材料研究所の悲願でありました。私も着任以来関係教官と力を合わせ、学長をはじめ各方面に御願ひしてきましたが、時節柄その実現は極めて困難のようでありました。しかるに、中山一郎会長らの絶大な御支援により、永年の夢であったこの学生定員が第2臨調進行中にもかかわらず、昭和57年度より30名に増員されたことは何とも大きな喜びでありご同慶の至りであります。

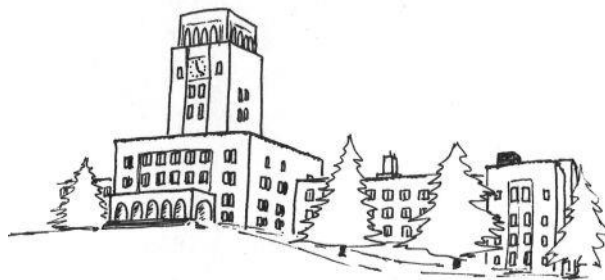
母校創立100周年を迎え、上記の慶びを思い出として、退官致すことは誠に幸運であったと感謝しております。

今後、先生方の御努力と同窓の皆様の御支援によって無機材料工学科が、飛躍的に成長し、社会に貢献されることを心からお祈りしてやみません。

私は、神戸大学に招かれましたので、同学に奉職し再び教育者としての余生を送ることになっております。依然としてここ暫くは、学会や各種委員会などにおいても同窓の皆様とお目にかかりお世話になることが多いと思います。倍旧の御指導と御鞭撻を賜りますよう改めてお願いしつつご挨拶と致す次第であります。

窯業同窓会規約

1. 本会は窯業同窓会と称する。
2. 本会は会員相互の親睦を図り窯業界の向上発展を期することを目的とする。
3. 本会は事務所を東京都目黒区大岡山東京工業大学内に置く。
4. 本会は以下の事業を行う。
 - (1) 会誌の発行
 - (2) 名簿の発行
 - (3) その他幹事会で必要と認めた事業
5. 本会会員は東京工業大学の窯業関係者で組織する。
6. 本会の経費は、会員その他からの事業寄附金、その他の収入で支弁する。会計年度は毎年4月に始まり翌年3月に終る。
7. 本会は毎年総会を開き以下について審議する。
 - (1) 会務の報告
 - (2) 役員の変更
 - (3) 規約の改正
 - (4) その他
8. 本会に以下の役員をおき任期は2年とする。ただし再選は差支えない。
 - (1) 会 長 1名
 - (2) 副 会 長 若干名
 - (3) 幹 事 若干名
 - (4) 常任幹事 若干名
9. 会長、副会長および幹事は総会で選出する。常任幹事は幹事の互選とする。
10. 会長は本会を総理し、副会長は会長事故あるとき代行する。常任幹事は会務（庶務、会計）を処理する。幹事は本会の重要事項を審議し、地方、各職場、クラス等の状況および本会に対する意見を本部に連絡する。
11. 本会は名誉会長および相談役をおくことができる。名誉会長および相談役は役員会で推薦し、総会で承認をうる。
12. 本会に支部を置くことができる。支部は本部と連絡を密にし、会の発展に協力する。



昭和56、57年度窯業同窓会役員

会 長	中山一郎		名誉会長	山内俊吉
副会長	素木洋一	田中弘	田中広吉	埜崎堅造
相談役	石塚正信	倉田元治	江副勇馬	大石信男
	田辺三郎	長崎勸	森谷太郎	田賀井秀夫
	齋藤進六			
常任幹事	浜野健也	小坂丈予	名取賢莊	加藤誠軌
	澤岡昭	山根正之	大門正機	上西義介
幹 事	左右田孝雄	尾野勇雄	長崎準一	福井哲三
	田上嘉秋	長谷正義	加藤政良	島岡達三
	赤沢次男	境野照雄	奥田進	佐野和夫
	田端精一	鈴木哲夫	愛甲昇	藤井豊男
	梅田夏雄	大庭宏	奥田博	小出儀治
	鈴木弘茂	藤井重信	太田千里	遠藤幸雄
	古賀義根	田中淳一	田中博一	毛利良雄
	大山本登	利根川洋	福浦雄飛	牧村信之
	山杉浦孝三	加藤務芳	吉田一重	佐野川建
	成瀬庸重	亀井四郎	川浪野正和	菊地重和
	宗宮重行	福井博	安竹了和	山本博孝
	堀江勲男	矢島一治	中村厚利	原田賢也
	吉野成夫	青木村脩	長谷川安弘	尾野谷惟
	武関孝善	木村場立	吉村昌望	水倉野芳
	井江七郎	大丸茂文	大津賀藤	
	今井久夫	中村哲朗		

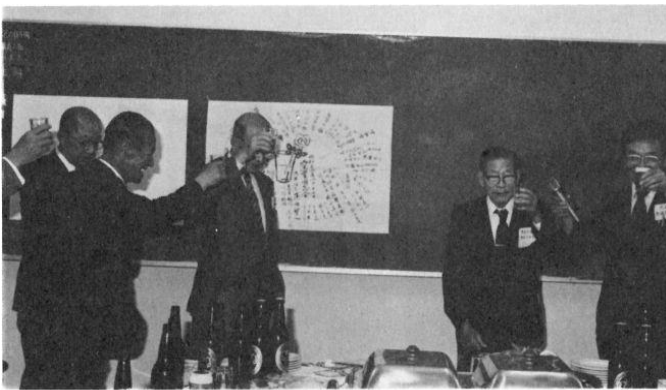
昭和 56 年度総会および懇親会

昭和 56 年度の総会と懇親会は、6 月 26 日、母校の無機材料工学科が大岡山石川台地区の新建物に移転したことを記念して、新キャンパスで開催した。総会に先立って午後 3 時から新しい建物と設備の見学会が行われた。

総会では会務報告と会計報告が承認され、次期会長として中山一郎氏が推戴された。その他の次期役員については、当日中山氏が海外出張中であるため会長一任になった。

ついで昭和 6 年卒業の真保義郎、田代幾太郎、長崎勸、半谷豊、丹羽誠、森井良一、山形安一、若林明の諸氏に卒業 50 周年記念として加藤鈔氏の作品が贈られた。

引続いての懇親会は最長老の故村上三五郎(大 8)先輩の乾杯で始まり、新入会員や大学院生も交えて百数十名の出席者を得て 8 時過ぎまで、昔の話から将来の夢までとりまぜて楽しい語らいのひとときを過ごした。



乾杯の音頭をとるありし日の村上三五郎老



臨時総会および年末懇親会

窯業同窓会は毎年 1 回、6 月頃に総会と懇親会を開いて会員相互の親睦を計っているが、今後は年末にも懇親会を開くことになり、その第 1 回を昨年末 11 月 11 日（金）に蔵前工業会館で開催した。

臨時総会では、前回の総会で選出された中山一郎会長から、昭和 56、57 年度の役員人事について報告があり了承された。

引続いての懇親会には、元教官の河嶋千尋先生をはじめ、古い卒業生の角田颯保（昭 3）、鈴木重夫、中山一郎（昭 5）、真保義郎、丹羽誠（昭 6）、

森谷太郎、西田一雄（昭 7）の諸氏、母校の教職員 20 名、在学中の大学院生を含む約 130 名が出席して大変な盛会であった。なお出席される予定の山内俊吉名誉会長から、風邪のため残念ながら休まれるとの連絡があった。

会の席上で、工学部無機材料工学科の学生の入学定員が、昭和 57 年度から 30 名に増員されることになったとの報告があり、出席者一同今後の会の発展を期待して午後 8 時散会した。



第 19 回 Dr. G. Wagener 記念学術講演会

第 19 回のワグネル講演会は昭和 57 年 2 月 25 日、本館第 1 会議室で開催された。当日の講師は前学長の齋藤進六先生、講演題目は「資源と材料」で、世界のエネルギー資源、鉱物資源、未利用資

源の分布と将来の需要などについての大局的立場からのお話があり、出席者に大きな感銘を与えた。

昭和 56 年度収支報告

自 昭和 56 年 4 月 1 日 ～ 至 昭和 57 年 3 月 31 日

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	382,061	56 年度総会、懇親会費	914,686
総会、懇親会費	579,000	記念品代	94,050
事業資金寄附	1,701,500	印刷代	884,250
銀行利子	13,345	役員会費	44,600
		通信費	321,430
		文具及び雑費	27,330
		次期繰越金	389,560
<hr/>		<hr/>	
計	2,675,906	計	2,675,906

昭和 56 年度事業資金寄附者芳名 (敬称略)

180,000 円	中山 一郎					
75,000 円	真保 義郎					
55,000 円	西田 一雄					
50,000 円	笹沼宗一郎					
35,000 円	名取 賢荘					
25,000 円	河嶋 千尋					
20,000 円	石塚 正信、	山内 俊吉、	川口 敏夫、	田上 嘉秋、	田辺 三郎	
15,000 円	梅田 夏雄、	遠藤 幸雄、	岡田 芳之、	亀井 四郎、	倉田 貢、	左右田孝男
	齋藤 進六、	牧村 信之				
14,000 円	浅野 正和、	宇野 達路、	新庄 重生			
13,000 円	石井 峰郎、	加藤欽一郎、	田端 精一、	原田 賢、	丹羽 誠	
12,000 円	田中 広吉、	塚本 宏、	小泉善之助			
10,000 円	赤沢 次男、	飯田 利平、	岩切 一良、	江副 勇馬、	大石 信男、	川浪 重年
	小林 三雄、	島岡 達三、	杉浦 正敏、	鈴木 重夫、	田代幾太郎、	田中 淳一
	高橋 久男、	長崎 勸、	長崎 準一、	長谷川安利、	半谷 豊、	福井 哲
	藤井 透、	丸茂 文幸、	森田 直文、	吉田 一栄、	若林 明、	加藤 誠軌
7,000 円	堀口 順康、					
6,000 円	野口 長次、	広田 直彦、	山本準之助、			
5,000 円	安保 英司、	伊奈辰次郎、	岩崎 郁夫、	小坂 丈予、	大庭 宏、	太田 千里
	荻納 淑、	河原田次剛、	小島豊之進、	齋藤 勝一、	酒井 享、	素木 洋一
	宗宮 重行、	田村 忠臣、	中沢三知彦、	埜崎 堅造、	藤井 豊男、	星野 勉
	堀江 鋭二、	松崎 錠三、	村上三五朗、	安竹 了和、	山根 正之、	若林 滋

4,000円	青木 斌、 岡本 十郎、 後藤 九五、 関沼 章夫、 羽田 晃治、 福崎 福七、	井関 孝善、 奥田 進、 国分 隆、 田中 弘、 長谷 貞三、 三沢 賢一、	伊藤 正三、 加藤 政良、 佐藤 功、 武田 雄二、 日浦 致、 水野 茂樹、	飯塚 誠厚、 角田 穎保、 斎藤 久明、 中尾竹次郎、 平尾 穂、 矢島一治男、	大槻 彰一、 木島 昇、 島田 信郎、 中島 節治、 平野 英昭、 竜谷 光三	大場 立夫 古賀 義根 島宗 孝之 延 義之 福井 博
3,000円	居上 英雄、 奥田 博、 吉武 素水、	石毛健二郎、 加藤 博之、 吉村 昌弘	石原 幸正、 佐沢 光夫、	稲村 泰、 佐野川 健、	永楽 秀光、 内藤 繁、	大野 勝美 森 元邦
2,500円	佐々木茂弐					
2,000円	安斎 和雄、 井上 圭吉、 池ノ上 典、 上野 三郎、 江上 浩二、 緒明 博、 大塚 邦夫、 岡田 昌三、 片山 恵一、 紀本礼一郎、 黒田 浩二、 小林 力、 坂田 正、 塩川 皓、 正田清一郎、 関口 淳、 高木 喜樹、 竹沢 義郎、 友田 正雄、 中島 直、 中村 義郎、 浜野 健也、 飛川 晨、 船木 長造、 増田 稔、 美崎 敬之、 森川日出貴、 山岡 信夫、 山本 博孝、	浅田 敬徳、 井川 博行、 市古 忠利、 植松 敬三、 江尻 寿憲、 尾野 勇雄、 大原 功、 加川 勲、 桂 宏、 菊池 武正、 桑原 直輝、 小林 通夫、 坂野 義郎、 塩田 政利、 白土 一男、 田代 楠熊、 高橋紘一郎、 竹村 章、 豊田 万三、 中村 厚、 長岡 為行、 浜野 宏輝、 樋口松之助、 古海 宏一、 松井 実、 水谷 惟恭、 八木 琢夫、 山形 安一、 横溝政太郎、	浅野 修二、 五十嵐幹治、 石橋 和史、 内田 健治、 江藤 哲夫、 大内 三男、 大村 心也、 加藤 拓、 鎌田喜一郎、 菊池 光治、 外川 進、 今間 朋春、 酒井 利和、 柴山 景介、 吹田安兵衛、 田中 貞夫、 高浜恒一郎、 俵 余志夫、 中尾 泰昌、 中村 周清、 二宮 秀明、 林 剛、 福与 寛、 細井 久孝、 松岡 富造、 湊 一郎、 矢田部俊一、 山崎 享、 吉川 俊吾、	浅見 進一、 伊藤 国彦、 今岡 保郎、 内山 浩、 海老 昱雄、 大木 通、 大矢 真吾、 加藤 春美、 川本正一郎、 北沢 章生、 小岩井忠道、 佐々木 健、 桜井 修、 渋谷 益男、 杉浦 孝三、 田辺 昌之、 高宮 陽一、 張 鴻烈、 中川 邦好、 中村 純一、 野口 昭男、 端山 潔、 藤井 重信、 堀合 直、 松村 茂、 宮入 英彦、 柳 正光、 山下 透、 若島 喜和、	新居善三郎、 猪股 吉三、 岩田 俊喜、 宇津木 剛、 遠藤 貞、 大城 敦之、 近江 成明、 加藤 健造、 木戸 雄二、 北島 圀夫、 小尻 昌弘、 佐藤 康、 沢野 清志、 島村 弘之、 鈴木 節三、 田平 伸生、 滝沢 一貫、 塚原 修一、 中川 順吉、 中村 敦、 羽生 宏、 原田 淳、 藤井 稔、 牧野 一郎、 松本 哲雄、 毛利 純一、 柳沢 和道、 山本 登、 渡辺 信彦、	伊藤 豊成 池内 容子 宇都宮泰造 上西 義介 遠藤 敏夫 大塚 淳 岡田 清 開田 丈夫 木村 脩七 久保寺正二 小玉 正雄 斎藤 鶴義 四宮 正善 下平高次郎 鈴木 健之 田村 信一 竹内 稔 出口 茂 中川善兵衛 中村 紀夫 長谷川 泰 日笠 泰行 藤田 洋介 析本 賜 三宅 通博 毛利 尚彦 山内 祐次 山本 博一 井上 悟
1,000円	重野 剛					

東京工業大学における窯業教育の歴史

我国における近代的な窯業教育は本学の前身である東京職工学校で開始された。

明治 14 年 5 月 26 日、浅草蔵前の地に創立された東京職工学校には、化学工芸科と機械工芸科とが置かれたが、明治 17 年に、化学工芸科の専修科目としてワグネル博士による窯業学が開講され、明治 19 年 8 月には上記の 2 学科を各専門にわけることになって陶器玻璃工科が生れた。

明治 23 年 3 月、東京職工学校が東京工業学校と改められ、明治 27 年には科名を窯業科と改称した。

明治 34 年 5 月、東京工業学校が東京高等工業学校に昇格したが、その際の 6 学科のひとつである窯業科の初代科長には工学博士高山甚太郎が任命された。大正 3 年には大阪高等工業学校の窯業科を合併して名実共に我国最高の窯業教育機関となった。この時代の教官は科長平野耕輔、工場長芝田利八、教授近藤清治および大阪高工から転任の教授金島茂太の諸氏が中心であった。

大正 12 年 9 月の関東大震災は窯場以外の窯業科の全設備を灰塵と化した。窯業科は駒場の帝大農学部には仮住いしたのち、翌年大岡山駅北側に建てられたバラック校舎に移転した。

昭和 4 年 4 月、官立工業大学の官制が制定されて東京高等工業学校が東京工業大学に昇格し、科名が窯業学科と改められた。大学昇格当時の主任教授は工学博士近藤清治で、翌年には硝子担当の教授として工学博士田端耕造が就任した。

昭和 9 年 5 月にはバラック校舎から新しく竣工した本館の建物に移転し、翌年には工場と窯場も完成した。

昭和 18 年 1 月には窯業研究所の官制が公布され、所長事務取扱いとして平野耕輔、所長付として教授山内俊吉、専任所員として教授河嶋千尋、教授鈴木信一その他の諸氏が任命された。

太平洋戦争への突入によって学生生活は大き

な影響を受け、卒業も繰上げられて昭和 16 年には 3 月と 12 月の 2 回学部の卒業式が行われ、昭和 17 年から昭和 22 年の間は 9 月卒業となった。

戦争の終結に伴って実施された学制改革によって、昭和 24 年から新制大学が発足し、昭和 28 年 3 月には旧制最後の卒業生と新制第 1 回の卒業生が同時に送り出された。当時の窯業関係の教官は教授山内俊吉、教授河嶋千尋、教授森谷太郎の諸氏が中心であった。新制度による大学院は昭和 28 年度から発足した。

本学では、戦後のいわゆる和田改革によって学科制度が廃止されたが、昭和 35 年にこの制度が復活されることとなって、無機材料工学科が生れた。なお、学科制度が廃止されていた期間中も、窯業関係の研究室および卒業生の団結は強く、窯業同窓会は従前通り維持されていた。

昭和 33 年 3 月、窯業研究所と建築材料研究所とを統合、整備して、新たに工業材料研究所が設置された。

新制大学の発足とともに、大学の組織と在学生数は急速に膨張し、昭和 30 年 7 月には工学部から理工学部、昭和 42 年 6 月には工学部と理学部とに分離した。大学院の組織も、発足当時の大学院工学研究科が昭和 31 年 4 月に大学院理工学研究科となり、昭和 50 年 4 月には新たに学部をもたない大学院総合理工学研究科が生れた。

昭和 54 年 4 月、大学院理工学研究科の無機材料工学専攻が独立した。

同年 6 月、工業材料研究所が長津田キャンパスに移転した。

昭和 55 年 7 月、無機材料工学科は本館から石川台 1 号館および石川台 4 号館に移転した。

昭和 57 年 4 月、無機材料工学科の学部学生の定員が 30 名に増員された。

東京工業大学の概要

現在、東工大は工学部、理学部および4つの研究所から成り立っており、無機材料関係者は工学部の無機材料工学科、工業材料研究所その他に所属しています。

学部は理学部が5学科、工学部が16学科から構成されていて、約3,100人の学生が在学しています。

学部は類別入学制をとっており、1年次学生は1類（理学系）、2類（材料系）、3類（応化系）4類（機械系）、5類（電気系）、6類（建設系）に分かれて入学し、2年に進むときに志望と成績順に各学科に所属します。無機材料工学科に進む学生は2類に入学することになっています。2年次および3年次では無機材料工学の基礎および専門科目について勉強し、4年生になると学科および関連研究所の各研究室に所属して卒業研究に従事します。

大学院には理工学と総合理工学の二つの研究科が設置されており、修士課程に約1,200人、博士課程に約400人の学生が在学しています。

大岡山地区の大学院理工学研究科無機材料工学専攻は修士課程学生定員17名、博士課程学生定員5名をもち、学生定員の1/2は学内推薦で、のこりは一般選考によって充足しています。

大学院総合理工学研究科に属する各専攻は学部をもたない大学院で、長津田のキャンパスにあります。材料科学専攻は工業材料研究所を母体としており、専攻の教官の多くは同研究所の教官が併任されています。

東京工業大学の構成と教職員数

大学の構成		教職員数
学部 大学院	理学部	学長 1 教授 222 助教授 191 講師 5 助手 430 その他の職員 769 計 1,618
	工学部	
	大学院理工学研究科	
附置 研究所	資源化学研究所	
	精密工学研究所	
	工業材料研究所	
	原子炉工学研究所	
附属研 究施設	天然物化学研究施設	
	像情報工学研究施設	
	資源循環研究施設	
	水熱合成材料実験施設	
附 属 機関等	附属図書館	
	保健管理センター	
	教育工学開発センター	
	総合情報処理センター	
	理工学国際交流センター	

学部学科及び類別学生定員

学部	類	学科名及び定員	類別定員
理 学 部	第1類	数 学 20	153
		物 理 学 25	
		化 学 40	
		応 用 物 理 学 34	
		情 報 科 学 34	
工 学 部	第2類	金 属 工 学 34	84
		有 機 材 料 工 学 20	
		無 機 材 料 工 学 30	
	第3類	化 学 工 学 75	118
		高 分 子 工 学 34	
	第4類	経 営 工 学 34	170
		機 械 工 学 60	
		生 産 機 械 工 学 34	
	第5類	機 械 物 理 工 学 34	146
		制 御 工 学 34	
		電 気 ・ 電 子 工 学 55	
		電 子 物 理 工 学 34	
情 報 工 学 40			
第6類	土 木 工 学 34	113	
	建 築 学 45		
	社 会 工 学 34		
計		784	784

工学部無機材料工学科の概要

現在の無機材料工学科は5講座から成り、教授5名、助教授5名、助手11名、技官・事務官7名の定員をもっています。

なお、鈴木弘茂教授は3月で定年御退官になり、また材料加工学の教授に工業材料研究所の木村脩七教授が3月から併任されました。

今年の大きなニュースは学部学生の入学定員が従来の20名から30名に増員されたことです。最近の厳しい社会状況の中でのこの学生増は文部省としても全くの異例の措置であって、現在セラミックスが如何に重視され、その将来が期待されているかがわかります。

しかしながら、現在のわが国で無機材料関係の技術者を組織的に養成している大学は本学の他に名古屋工業大学および京都工芸繊維大学を数えるだけで、博士課程の置かれている大学は本学に限られています。

これを金属材料や高分子材料などにおける大学教育の現状と比較してみると依然として著しく弱体であることを否定することはできません。

材質工学各分野の学部学生定員

	無機材 科工学	金属工 学系	応用化 学系	繊維工 学系	理学部 化学系
大学数	3	25	78	9	42
学科数	3	33	109	16	46
学生定員	122	1,629	8,414	685	2,184

なお、全国の大学の応用化学系学科および理学部化学科の全講座数の50%以上は有機化学および高分子化学関係の教官で占められており、無機化学、工業無機化学、セラミックス等を専攻する教官はそれらの講座の高々5~10%程度を占めるに過ぎないと推定されます。

工学部無機材料工学科の組織と職員（昭和57年4月）

講座名	教授	助教授	助手	技官・事務官
無機合成材料	加藤 誠 軌	水谷 惟 恭	太田 京一郎 植松 敬 三	松山 勝 美
結晶質材料	宇田川 重 和		浦部 和 順 井川 博 行	福富 路 子
非晶質材料		山根 正 之	井上 悟 黒田 浩 二	山本 孝 子
鉱産原料	小坂 丈 予		平林 順 一 岡田 清	
材料加工学	木村脩七(併任)	大門 正 機	後藤 誠 史 浅賀 喜代志	大沢 栄 也
共通			林 剛	上西 義 介 桜井 修

ライバルが少ないということは、当人たちにとっては稀少価値にめぐまれていることになり、卒業生の就職は極めて順調で求人数が就職希望者

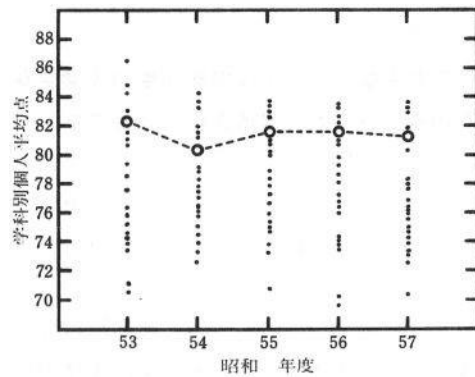
の10倍もあるという状況です。学部卒業生のほとんどは大学院に進学するので、就職の対象となるのは大部分が修士課程修了者です。

無機材料工学科は当節は本学の中でもっとも人気のある学科の一つで、在学生の成績も優良です。右の図は2年生になって各学科に所属する際の、学科別個人平均点を示したもので、ここ数年当学科に進む学生の成績が本学の中でも上位を占めていることがわかります。

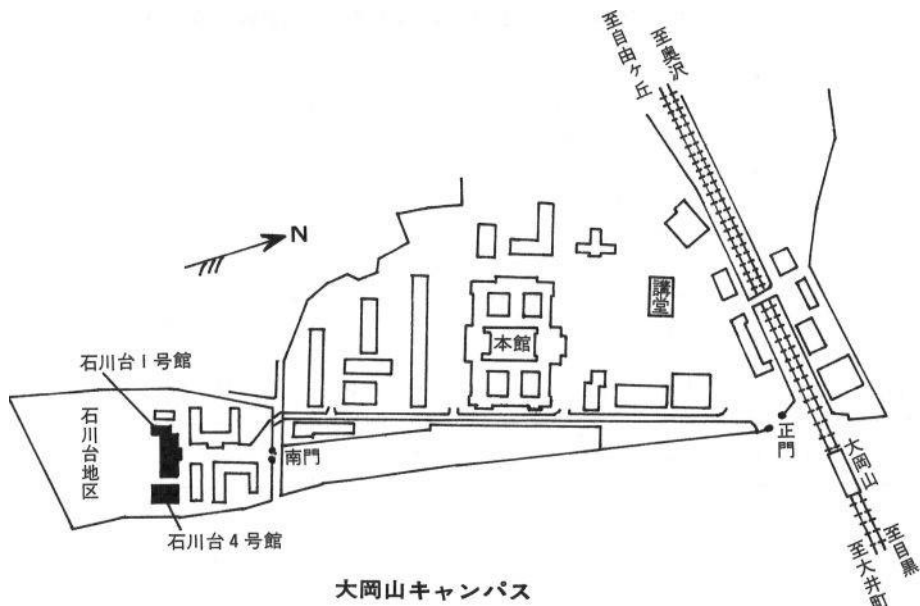
なお、当学科では従来から自由度の大きい教育を行っており、実験実習以外は必修科目を指定せず各人の志望を生かすことができるよう配慮しています。

施設面でのニュースは、石川台地区(下図参照)の環境が著しく整備されたことで、道路とトンネルの改修工事が終わり、長津田との間の光ケーブル通信回線もまもなく完成する予定です。建物としては、無機材料工学科の石川台1号館と4号館のほかに、旧資源化学研究所が石川台3号館とな

って有機材料工学科が入り、旧精密工学研究所が石川台2号館となって機械工学および教育工学の教官が入居しました。



学科所属の時点における学科別個人平均点
○ 無機材料工学科 ● 他学科



無機材料工学科 (学部) 卒業生 (昭和 56 年度)

氏 名	研究室	卒 業 研 究 題 目	進 路
岩 井 明 仁	宇田川	X 線単結晶法による Ca_2SiO_4 の相転移の研究	修士課程進学
大 井 良 典	加 藤 水 谷	BaMnO_{3-x} の加熱変化の追跡	〃
岡 均	加 藤 水 谷	CuYO_2 の積層欠陥の TEM 観察	〃
川 崎 真 司	浜 野	機械的性質の測定に影響を与える要因について	〃
岸 和 博	木 村 大 門	けい酸二石灰の β - γ 転移に及ぼす熱履歴の影響	〃
清 原 正 久	鈴 木 山 根	球形ジルコニア微粒子の調製	〃
佐 藤 信 行	宗 宮 吉 村	希土類リン酸塩結晶の融解合成	三菱商事(株)
曾 我 肇	小 坂	明バン石族鉱物の生成条件と化学組成に関する研究(その 4)	修士課程進学
高 木 達 雄	木 村 大 門	セメント硬化体中のイオンの拡散	〃
中 条 一 秀	鈴 木 井 関	焼結性炭化ケイ素粉末の合成	〃
能 秀 雄	澤 岡	超イオン伝導におよぼす圧力効果	品川白練瓦(株)
松 井 久仁雄	小 坂	南関東ローム層中の粘土鉱物に関する研究	修士課程進学
松 崎 浩	鈴 木 井 関	炭化ケイ素のホットプレス接合に及ぼす圧力の効果	〃
宮 田 昇	丸 茂 森 川	KFeF_3 結晶中の電子分布について	〃
毛 利 護	木 村 大 門	C_4AF の水和に及ぼす添加物の影響	〃
藪 田 和 哉	宇田川	多孔質アルミナセラミックスの作製法とガス分離能	〃
山 川 孝 宏	加 藤 水 谷	アーカイメージ FZ 法による Y_2O_3 - ZrO_2 系単結晶の育成と評価	〃
余 語 瑞 和	鈴 木 山 根	レーザーカロリメーターの作製	〃
渡 部 俊 也	宇田川	コーディエライト-ムライト系焼結体の組成と熱膨張	〃

無機材料工学専攻（修士課程）修了者（昭和 56 年度）

氏 名	研究室	修 士 研 究 題 目	進 路
小 畑 正 明	宇田川	マイカセラミックスの組織と諸性質に関する研究	電気化学工業(株)
及 部 晃	鈴木 山 根	MemXn-CaO-Al ₂ O ₃ 系 (X=F, O)のガラス化範囲と 2, 3 の性質	博士課程進学
坂 本 敏	宇田川	高純度マグネシアクリンカーの粒界出相に関する研究	旭 硝 子 (株)
下 田 直 之	小 坂	SiO ₂ -Fe ₂ O ₃ -H ₂ O 系鉱物の天然における産状と人工合成について	三菱鉱業 セメント(株)
田 辺 淳	木 村 大 門	Akermanite の水熱反応	ニチアス(株)
鶴 見 敬 章	宇田川	β-ガレート (R ₂ O·11Ga ₂ O ₃)の導電性と結晶化学	博士課程進学
中 沢 桂 一	鈴木 山 根	低温合成による TiO ₂ - SiO ₂ 系ガラスの作製	旭化成工業(株)
中 村 篤	鈴木 山 根	AgX-PbX ₂ -CsX-CdX ₂ (X=Cl, Br)系のガラス化範囲と 2, 3 の性質	(株) 日立製作所
細 井 雄 一	加 藤 水 谷	アルコラートの加水分解によるジルコニア微粉末の合成	富士写真 フィルム(株)
山 口 修	木 村 大 門	フライアッシュの水和反応	日本セメント(株)
沢 木 至	加 藤 水 谷	酸化亜鉛の気相合成と加熱処理による粒子形態の変化	三菱化成工業(株)

無機材料工学専攻（博士課程）修了者（昭和 56 年度）

氏 名	研究室	博 士 研 究 題 目	進 路
篠 崎 和 夫	加 藤 水 谷	酸化物固溶体の焼結に関する研究	東京芝浦電気(株)

長津田だより

工業材料研究所所長 浜野健也（昭23）

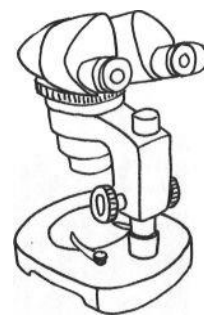
キャンパスを取り囲んでいる木立も、色とりどりの緑にもえ出て来ました。工業材料研究所の長津田の新キャンパスに移転してからやがて満3年になります。整備期に入っている長津田にも、この1年間少しずつですが変化がありました。新しい建物が完成して超高電圧超高真空電子顕微鏡が移動し始め、懸案だった食堂と図書館分館の建物が連結されて分館が拡張され、またクローズドシステムによる新しい考えにもとづくMHD発電の研究棟がほぼ完成しました。

昨年からの継続工事として、齋藤前学長の御尽力で予算化された長津田と大岡山の両キャンパスを結ぶ光通信ケーブルの埋設が終り、現在送受信のテストが行われています。今年度中には工材研にも端末機が入る予定で、これによって大岡山の無機材料工学科や原子炉工学研究所とさらに密接な連繋ができるものと期待しています。またこの春から工材研の裏にあたる山を崩して整地し、新しい研究棟の敷地と運動場を作る大規模な工事が始まりました。少し緑が減るのは残念ですが、工材研としても待ち望んでいた工事です。と云うのは、現在工材研では建物面積が大変不足しています。土地の造成が終われば新しい建物をたててもらえる可能性があるからです。

移転したばかりなのにもう建物面積が足りない、と云うのは、前号でも書いたようにこの2年間に工材研が8部門から12部門相当構成の大門制に拡大改組されたからです。この新しい部門制に対応する態勢作りを現在進めております。すでに3人の教授、助教授が昇任または着任し、現在5つの委員会で教官選考が進められています。今年度末までにはさらに研究態勢を充実できると期待しています。現在の工材研の研究組織と大学院総合理工学研究科との相互関係は別表の通

りです。

長津田キャンパスでは多数の講演会などが行なわれていますが、特に昨年の大学創立百周年記念日にあわせて、その前日の5月25日には宗宮重行教授のお骨折りによって、“Ceramic Science and Technology at the Present and in the Future”が外国人5名を含む150人程の出席で、また翌26日には本学第1号の名誉博士の学位を授与されたG. Petzow教授の記念講演会が約100人の来会者を集めて、それぞれ盛大に催された。また今年の3月23日～26日には、工材研附属水熱合成材料実験施設（施設長・宗宮重行教授）が中心となって、水熱合成国際会議が海外からの出席者41名を含め約120名の出席者によって非常に盛會に行なわれた。このほか工材研でもこの1年間に10回位の講演会を開催している。工材研の研究室に所属している57年5月1日現在の職員以外の研究者は以下の通りです。学部卒論学生10名、材料科学専攻の修士1年次14名、修士2年次14名、博士1年次6名、博士2年次3名、博士3年次5名、研究生等33名、これらの内、海外からの留学生は10名である。



工業材料研究所の組織と職員（昭和57年4月）							
工業 材料 研究所						大学院総合理工学研究科 協力講座	
部門	研究分野	教授	助教授	助手	技官・事務官	専攻名	講座名
材料基礎	結晶体物性	丸茂文幸	森川日出貴	田中清明	湊 一郎	材料科学	結晶化学
	高純度材料	齋藤安俊		丸山俊夫	佐々木清裕	〃	相転移
	材料構造解析	星野芳夫	橋爪弘雄	宇都宮泰造		〃	
材料プロセス	無機焼成材料	浜野健也		中川善兵衛	長谷川美憲	〃	固体反応
	無機熔融材料		中村哲朗	高木喜樹	伊藤紀子	〃	非晶質体
	合成無機材料	宗宮重行	今井久雄	伊藤義孝 高見敬一		〃	結晶合成
	超高压高温材料	澤岡 昭		近藤建一		〃	電磁物性
	超高真空材料	木村脩七		安田栄一		〃	
防災材料開発	防災材料工学		古村福次郎	安部武雄		社会開発工学	
	材料耐久物性	小林迪夫		田中享二		〃	建築材料工学
	複合材料開発	黒正清治		小林克己		〃	
	未利用資源材料開発	(客員)加藤悦朗	(客員)見城忠男				
水熱合成材料実験施設	(併任)宗宮重行	吉村昌弘	虎谷秀穂				
工場 共通			多田彦二	石井 元、 宗俊光博、 椿富美子			

材料基礎部門、材料プロセス部門、水熱合成材料実験施設の教官の大部分が同窓会員である。



材料科学専攻（修士課程）修了者（昭和56年度）

氏名	研究室	修士論文題目	進路
大矢 豊	浜野	チタン酸アルミニウムセラミックに関する研究	博士課程進学
酒部健一	星野	金属モリブデンおよび三酸化モリブデン表面への水溶液中における重金属イオンの濃縮	旭化成工業(株)
佐谷野顕生	浜野	ZnOバリスタに関する研究	東京芝浦電気(株)
高橋東之	齋藤	ペロブスカイト型複酸化物における陽イオンの拡散挙動, $\text{NaTaO}_3\text{-KTaO}_3$ および $\text{BaTiO}_3\text{-SrTiO}_3$	東京三洋電気(株)
田辺靖博	木村	炭素繊維/炭素複合材料の組織と物性変化	博士課程進学
野末 寛	丸茂 森川	強誘電体 $\text{Nd}_2\text{Ti}_2\text{O}_7$ および $\text{Ca}_2\text{Nb}_2\text{O}_7$ の構造に関する研究	日本電気(株)
原島知穂	宗宮 吉村	アークイメージ炉による窒化珪素と各種酸化物の高温融解反応	ウシオ電機(株)
藤井和隆	宗宮 吉村	$\text{Nd}_2\text{O}_3\text{-P}_2\text{O}_5\text{-H}_2\text{O}$ 系における相平衡と $\text{NdP}_5\text{O}_{14}$ 単結晶の育成	日本電気(株)
藤井哲雄	丸茂 森川	ダイヤモンドアンビルによる V_2O_5 の圧力変化の研究	博士課程進学
マニク・ブラゲ ジャラトラ	宗宮 吉村	Phase Equilibria of the $\text{ZrO}_2\text{-Y}_2\text{O}_3\text{-Cr}_2\text{O}_3$ System at 1600°C in Air.	博士課程進学
李 成元	浜野	ZnO-希土類酸化物系セラミックスの焼結と電気的性質	博士課程進学

材料科学専攻（博士課程）修了者（昭和56年度）

氏名	研究室	博士論文題目	進路
飯島賢二	丸茂 森川	超構造をもつゲルマニウム酸塩圧電結晶の構造と相変化	松下電器(株)
小林久理真	齋藤	硫酸ナトリウムの相転移と導電特性の応用に関する研究	旭化成工業(株)
谷 英治	宗宮 吉村	水熱条件下における $\text{ZrO}_2\text{-CeO}_2$ 系の結晶化と相関係	九州工業試験所
奏 まゆみ	丸茂 森川	アバタイト型結晶の構造化学的研究	東京医歯大研究生

原子核工学専攻（修士課程）修了者（昭和56年度）

氏名	研究室	修士論文題目	進路
朝野英一	鈴木 井関	高速炉用制御材としての窒化ユーロピウムの研究	石川島播磨重工業(株)
山下和彦	鈴木 井関	緻密質炭化ケイ素焼結体のアルミニウムによる接合	東京電力(株)

エネルギー科学専攻（修士課程）修了者（昭和56年度）

氏名	研究室	修士論文題目	進路
勝水健一	鈴木 井関	原子炉用黒鉛の弾性定数測定に関する基礎的研究	日本ニュークリア フュエル(株)
土井孝吉	鈴木 井関	反応焼結炭化ケイ素の熱衝撃抵抗に関する評価	トヨタ自動車工業(株)

旭焼

旭焼は我国における近代窯業の父といわれるワグネル先生の創案になるもので、日本古来の絵画描法を釉下に施した美術的価値の高い低火度焼成陶器です。先生は明治16年からこの研究に着手し、明治18年には農商務省の補助を得て赤坂葵坂に試験工場をつくり、吾妻焼と命名しましたが、明治20年に設備を東京職工学校に移して旭焼と改称しました。明治23年、浅野総一郎の出資で旭焼製造所ができて主として輸出用の飾タイルなどを製造しましたが、明治29年に経営難のため閉鎖されました。

表紙および左の写真の額皿は現在は平野陶磁器コレクションとして無機材料工学科に保管展示してあります。



旭焼額皿（明治18年）

窯業同窓会総会および懇親会の御案内

新緑の候を迎え皆様元気でご活躍のことと拝察申し上げます。

さて、本年の総会および懇親会を下記の通り開催することに致しました。皆様のご出席を心からお待ちしております。

1. 日時 昭和57年7月9日（金）
総 会（定刻開催） 午後5時30分～6時
懇 親 会 午後6時 ～ 8時
2. 場 所 蔵前工業会館
港区新橋2-19-10 電話571-0637
3. 総 会 議 題 会務報告、会計報告、規約改正の件、
卒業50周年の諸氏への記念品贈呈、その他。
4. 懇 親 会 会費 5,000円

昭和57年6月3日

会 長 中 山 一 郎

お 願 い

常任幹事 加藤 誠 軌

本年度の総会のご案内と会誌をお届けします。今年材料元年だそうで、ニューセラミックスが時代の花形に躍進して、本学でも無機材料工学科の学部入学定員が20名から30名に増員されました。

ところで、今後の窯業同窓会のあり方ですが、単なるやきもの屋の老人クラブとしてではなく、若い人達も積極的に参加して、会員相互の交流の輪を拡げて運営することが必要であると考えます。

何事でも積極的に活躍するにはある程度の先立つものが必要です。窯業同窓会は従来は有志の寄附による事業資金によって運営して参りましたが、昨年度の醸金者の内訳を集計した結果は以下の通りです。

昨年度20,000円以上寄附して下さった方は11名で計520,000円、10,000円から20,000円の方が43名で計503,000円、2,500円から7,000円の方が78名で計329,500円、2,000円以下の方が175名で計349,000円、これらを集計すると307名で、合計が1,701,500円となります。なおこのうちの520,000円は昨年末に開かれた臨時総会と懇親会の席上で、ご出席の会長はじめ有志の方々31名から特別に寄附していただいた事業資金です。

ちなみに、現在の会員数は約1,200名で、総会や懇親会の出欠端書の回収数は毎回400通程度、懇親会への出席は100名位というのがおよその数です。

名簿を度々発行するようにとのご要望は多いのですが、現在程度の会の収入では毎年会誌を発行して総会と懇親会を開くのがやっとで、名簿を発行するのは容易なことではありません。広告収

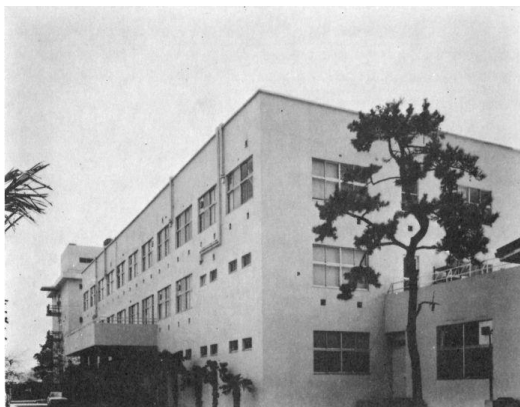
入は名簿を発行する費用と送料の半分にも足りないというのが従来の例で、希望者だけに配布する名簿では単価が非常に高いものになってしまいました。

それに加えて、会員の異動が非常にはげしいので名簿の原稿は毎回全面的に書直して索引を作り換える必要があり、そのための担当者の事務量は相当なものです。日本語のワードプロセッサを導入できれば、住所の変更や索引の作成が容易になって、名簿の大幅なコストダウンが可能になるのですが、これにも先立つものが必要です。なお、会の運営と事務処理に必要な人件費については会からは一切支出しておりません。

会費を徴収せよとのご意見もありますが、この場合どれ位の方々が送金して下さるかは疑問で、現在よりも収入が減るという見方もあります。また、会費を徴収しない人に会誌を送らないということは会の発展のためにマイナスになると思われます。入会金をとれとのご意見もありますが、毎年の卒業生が少ない現状では大幅な収入増は期待できず、既に入会している会員からこれを取り立てることも難しいことです。

という次第で、会の財政基盤を確立するための特効薬はなかなか見付からないというのが本音です。窯業同窓会を単なるやきもの屋の老人クラブ以上の存在にするには、従来は同窓会に無関心であった会員の方々にも実状をよく認識していただく他はないと考えます。

これらの事情をご賢察のうえご協力いただける場合には、同封の振替用紙で事業資金をご送金下さるようお願い申し上げます。なお、郵便局振込の場合は口座番号東京0196855 窯業同窓会宛にお願いします。



現在の無機材料工学科の建物

東京工業大学工学部無機材料工学科

〒152 東京都目黒区大岡山 2-12-1

石川台1号館, 石川台4号館

☎ (03) 726-1111

